小学生の英語学習における文字認識に関する研究

—英語の掲示物が児童の学びに与える影響—

The Influence of English School Room Signs on Japanese Elementary School Students' English Word Recognition

巽　　徹*・岡田真理子**・ジャクソン・リー***

Toru TATSUMI, Mariko OKADA and Jackson LEE

1. はじめに

文部科学省が提示した『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』(2013) によって，小学校高学年における英語の教科化及び中学年における英語活動の導入が発表された。これまでの音声中心の英語学習から，高学年では 4 技能を扱う内容に改訂が予定され，英語の文字の扱い方への関心が高まっている。

小学校の指導現場では，英語の文字指導の在り方について研修を行うとともに，英語の文字に自然に触れる機会を充実させるため授業内で英語による表示を増やしたり，授業外でも英語の掲示物を多く作成したりしている。一方で，児童がそれらの掲示物を通して，どのように英語の文字や単語を認識し，理解しているかという研究は多くない。

そこで，本研究は，「英語の掲示物」に注目し，児童に英語の掲示物に関するクイズなどを実施することで，児童の英語の掲示物の認識の実態を明らかにする。それらの実態から，英語の掲示物がどの程度児童の学びに結びついているのか，また，児童がどのように英語の文字を認識しているのかを明らかにする。

*　岐阜大学教育学部英語教育講座
**　垂水町立東小学校
***岐阜大学教育学部非常勤

2. 目的

2.1 英語の掲示物に関する先行研究

影浦 (2000) は，学級や学校の英語の学習環境や雰囲気を充実させる手立てとして，例を挙げて英語の掲示物を紹介している。渡邉・佐藤・粕谷 (2010) は，中学校で本格的に文字の学習を始める前に，児童が掲示物などを通して英語の文字と「感覚に訴える出会い方」をする機会を持つことの重要性を述べている。本田・山本・寺井 (2013) は，外国語活動に関する掲示物の実態調査を行い，掲示物の種類，掲示場所，掲示物のねらいを明らかにした。その結果，調査対象とされた英語の掲示物は，英語の学びが主な役割とされていなかったことを指摘し，「学びに繋がる掲示物」を作成する必要性を主張している。

このように，先行研究では，英語の掲示物の活用に関する具体的実践例や，指導のアイデア等の提示，英語の掲示物の分類に対する研究などが行われてきた。しかし，掲示物が英語の学びに，どのような影響を与えるかという研究は未だ行われてこなかった。本研究では，実際に小学校で使用されている英語の掲示物を児童がどのように認識しているかを調査し，そこから，英語の学びに与える影響や児童が英語の文字をどのように認識しているかについて明らかにする。さらに，児童の英語や英語学習に対する意識と，掲示物の認識の度合いに何らかの関連があるのかを明らかにしたい。

2.2　本研究の研究課題

⑴ 児童が英語の掲示物をどのように認識し，どの程度理解しているかを明らかにすること。
⑵ 英語や英語学習への意識と⑴の掲示物からの英語の学びとの関係を分析し，明らかにすること。

上記の課題に迫るために，本研究では，児童が学ぶ校内にある実際の掲示物の写真とその意味を一致させるクイズと，英語や英語学習に対する意識を回答するアンケートを含む質問紙による調査を行った。

3. 調査について

3.1 調査方法

3.1.1. 対象

岐阜県内のM小学校　５・６年生の児童236人（５年生109人　６年生122人　特別支援学級５人）を対象に調査を行った。

3.1.2 実施期間及び方法

平成27年９月１日から９月７日に，各学級の担任の教師により実施した。無記名による質問紙調査で，時間は説明なども含め，10分程度を目安とした。

3.2 M小学校の英語教育について

M小学校は，20年程前から，英語の活動や異文化理解を扱う活動を行っており，地域の中心となって英語学習を推進している学校である。現在は，５・６年生は，週１回，１年生から４年生は２週間に１回の外国語活動の授業を実施している。

７・８年前から，校舎内のあちこちに，英語の掲示がなされ，英語を学ぶ環境の充実が図られている。特別教室等には，入り口に教室名が英語で掲示してあり，階段には，教科名を表す英語，曜日を表す英語，月を表す英語などがそれぞれまとめて掲示してある。特に，英語を学ぶための部屋（ハッピールーム）には，さまざまな掲示物があり，たくさんの英語表現や海外の様子を紹介する写真が多く掲示されている。これらの掲示物は，英語学習の雰囲気作りや，外国語活動に対する意欲付け，授業で学んだことを思い出すきっかけを作ることを目的として作成されている。

調査対象となったM小学校の教員からの聞き取り調査によると，M小学校５，６年生では，『Hi, friends! 1, 2』を用いて「聞くこと」「話すこと」を中心とした授業を実施している。英語の単語を読んだり，英単語を書いたりする練習などの直接的な英語の文字指導は行っていない。また，５年生と６年生で，指導上，英語の文字の扱い方が大きく異なっていることはないということであった。また，何人かの子どもたちが英会話スクールや学習塾に通っているものの，多くの児童にとっては学校の授業が英語を学ぶ主な機会であると判断される。

3.3 内容

3.3.1. 質問紙について

質問紙は，掲示物からの英語の学びを調査するクイズの部分（以下，「クイズ」と呼ぶ）と，英語や英語学習に対する意識を調査するアンケートの部分（以下，「アンケート」と呼ぶ）の二部構成になっている。児童が，質問紙に抵抗を感じないように配慮し，質問紙の題名を，『M小博士クイズ』とした。

「クイズ」における各設問は，調査対象となったM小学校内にある，英語の掲示物の写真とそれが表す意味とを一致させる問題である「問1」から「問4」と，この４問とは出題形式や解答の仕方が異なる「おまけ①」「おまけ②」の全６問からなる（図１）。

「クイズ」に使用した英語の掲示物の写真は，特別教室等の名前を表すものと，教科や曜日を表すものである。教室の名前を表すものを使用したのは，掲示してある場所によって，その表す意味を児童が日常生活の中で容易に理解できると考えたからである。また，学校内にある部屋を表すものであるため，児童が校外でこれらの単語を学んだ可能性は低いと考えられ，校内での学びの影響を測りやすいと考えた。

M
小博士☆クイズ
小のみなさん、こんにちは。
今日は、みなさんにクイズに挑戦してもらいたいと思います。
楽しみながら取り組んでください。
岐阜大学教育学部4年
1 図書室を表しているものは、どれでしょう。( )の中に○をつけましょう。
Science Room
Library
Music Room
( )
( )
( )
自信がない
2 保健室を表しているものは、どれでしょう。( )の中に○をつけましょう。
Nurse's room
Art room
Computer room
( )
( )
( )
自信がない
3 家庭科室を表しているものは、どれでしょう。( )の中に○をつけましょう。
Teacher's Room
Copy Room
Cooking Room
( )
( )
( )
自信がない
4 これは、どの場所を表しているでしょう。( )の中に○をつけましょう。
Principal's office
( ) 職員室
( ) 会議室
( ) 校長室
自信がない
おまけ① 下の3つのうち、2つは同じ場所を表しています。どれとどれでしょう。
2つ選んで、( )の中に○をつけましょう。
Meeting Room
Rest room
Toilet
( )
( )
( )
自信がない
おまけ② 下の4つの中で、1つだけ仲間はずれ(違う種類の言葉)があります。
どれでしょう。( )の中に○をつけましょう。
Music Science Friday Math
( ) ( ) ( ) ( )
自信がない
どうして、それが仲間はずれだと思いますか。理由を書ける人は、書きましょう。
☆アンケート☆
自分の気持ちに当てはまると思うものすべてに、○をつけましょう。
○はいくつつけてもいいです。
( ) ハッピータイムが楽しみだ。
( ) もっと、英語が話せるようになりたい。
( ) もっと、他の国のことを知りたい。
( ) 英語の看板やポスターがあると、わくわくする。
( ) ハッピールームに入ると、
「英語をやるぞ！」という気持ちになる。
★ありがとうございました★

図１　質問紙

質問紙の各設問（図１）からわかるように，部屋の名前を表す掲示物は，カラフルでデザインが工夫されている。一方で，教科や曜日を表すものは，黒の活字で示された文字のみの掲示物となっている。これら二種類の掲示を取り上げ，児童の理解の違いがあるかについても考察を加えたい。質問紙で使用された語の一覧は，表１の通りである。

表１　質問紙に使用した掲示物の英語一覧

部屋の名前を表すもの	Science Room	Library	Music room
	Nurse's room	Art room	Computer room
	Teacher's Room	Copy Room	Cooking Room
	Principal's Office		
	Meeting Room	Rest room	Toilet
教科	Music	Science	Math
曜日	Friday		

「クイズ」では，敢えて「分からない」という選択肢を設けず，分からなくてもどれかを選択することとした。合わせて，解答に対する自信の度合いを「結構自信がある」「自信がない」のうちから選び，回答してもらうこととした。それにより，児童の「何となく分かる」という認識の仕方も含めて調査を行おうとした。

3.3.2.「クイズ」設問の内容とねらい

「問１」から「問４」は，部屋の名前などを表す掲示物の写真と，それが表す意味を一致させ解答する形式である。

「問１」は，「クイズ」各設問の解答意欲を高め，解答方法に慣れさせる導入および意欲づけのための設問である。そのため，英語の文字だけでなく，掲示物の文字の色や絵，模様などの情報を含んだ掲示物そのものを選択肢として使用し，比較的容易に部屋の名前を連想することができる設問となっている。

「問２」は，英語の文字の形と色をもとにして正しいものを選択できるかを調査する設問である。そのため，選択肢は，実際の掲示物には含まれている部屋を連想させる絵や模様を見えないように画像処理してある。この点で「問１」と異なり，解答するための判断材料が限られているが，選択肢はそれぞれ色が異なっているため，英語の文字認識が確実でなくても，掲示物全体の雰囲気で正解を選択できる設問となっている。

「問３」は，文字の形のみをもとにして正解を選択できるかを調査する設問である。選択肢は，掲示物の中の部屋を連想させる絵や模様を見えないようにしただけでなく，同じ色の掲示物のみを設定している。児童は，色ではなく，文字のみを認識して選択しなければならず，「問２」よりも限定された材料を基に判断することになる。

「問４」は，掲示物の位置や児童が目にする頻度の影響を調査する設問である。校長室（Principal's Office）は校舎の端にあり，児童が頻繁に通る場所にはなく，掲示物の設置位置も児童の視線よりも高い場所であったため，児童が目に触れる機会が少ないのではないかと判断した。

「おまけ①」は，「Meeting Room」「Restroom」「Toilet」から，「同じ場所」を選ぶ「仲間選び」の問題である。調査校の異なる二つの場所にある「お手洗い」には，それぞれ「Restroom」と「Toilet」という二種類の異なる単語が掲示されており，児童が生活体験の中でこれらの掲示を同じ意味として認識しているかを調査する設問である。選択肢となっている掲示物には，直接的に部屋の名前を連想させるような絵は見えないようにしたが，背景の模様はそのまま残した。同じ意味を表すものは「Restroom」と「Toilet」であるが，「Meeting Room」「Restroom」は「room」が共通した単語として用いられている。また，「Meeting Room」「Toilet」の掲示物は，ともに背景に水玉模様があり雰囲気が似ている。解答が分からなかったときに，文字や単語の綴りに注目して「room」を共通している目印として選択するのか，背景の雰囲気が似ているものを選択するのかを知ることで，児童がどのように英語の掲示物を認識しようとしているかを調べようとするねらいである。

「おまけ②」は，教科名と曜日を表す英単語から「仲間外れ」を探す問題である。これらの掲示は，教科名や曜日など関連するグループの

単語が一つずつ，階段一段ごとに連続して設置されている。「クイズ」では，活字の部分のみを提示しているが，実際には，図２のように，活字による表示と意味を表す絵や日本語の意味と共に掲示されている。認識の仕方を詳しく分析するために，「仲間外れ」だと判断した理由についても回答してもらうこととした。

図２　教科名，曜日の掲示物

3.3.3. アンケート項目の内容とねらい

「アンケート」の内容は，児童の英語や英語学習に対する意識について問う５項目であった。

表２「アンケート」の項目

①	ハッピータイム（英語活動）が楽しみだ。
②	もっと英語が話せるようになりたい。
③	もっと他の国のことを知りたい。
④	英語の看板やポスターがあると，わくわくする。
⑤	ハッピールーム（英語活動室）に入ると「英語をやるぞ！」という気持ちになる。

複数回答が可能で，自分の気持ちに当てはまると感じるものすべてに〇をつけるように指示されている。

表２で示したそれぞれの項目は，児童の次のような意識の表れと捉え分析することとした（表３）。

表３　英語学習に関する児童の意識

①	学校で行われる外国語活動への意欲に関すること
②	英語の技能面での向上心に関すること
③	異文化への興味関心に関すること
④	掲示物への興味関心に関すること
⑤	掲示物が，児童の英語活動への意欲に与える影響に関すること

「アンケート」で回答された〇の数によって，英語や英語学習に対する全体的な意識の高さの目安とすることにした。

4. 結果・考察

当初，対象人数は，５年生109人，６年生122人，特別支援学級５人，合計236人であったが，特別支援学級は学年合同のため，学年が分からなかったものが４名あった。結果，５年生109人，６年生123人，合計232人が集計の対象となった。部分的に無効解答のある児童も全体の人数に含めているため，また，小数第一位を四捨五入しているため，合計が100％にならないものもある。

4.1. 提示物の認識・理解について

「問１」から「問３」は，それぞれ以下の結果が得られた（図３～図５）。

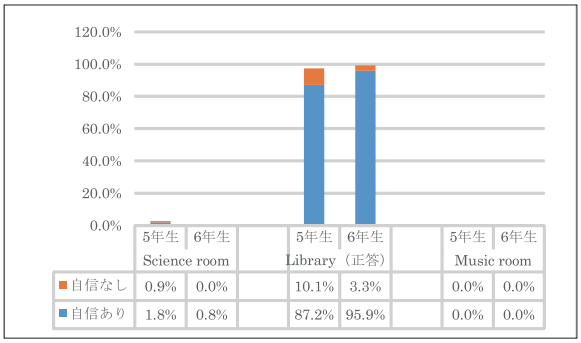


図３　問１「Library」（学年別）

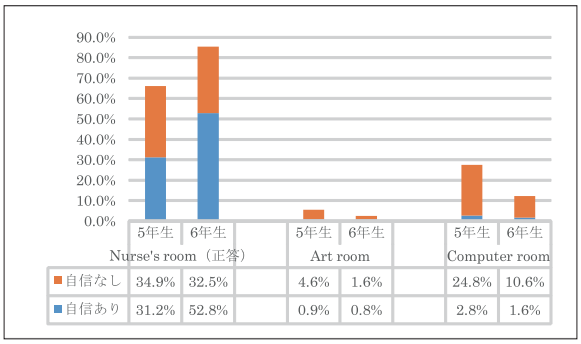


図４　問２「Nurse's room」（学年別）

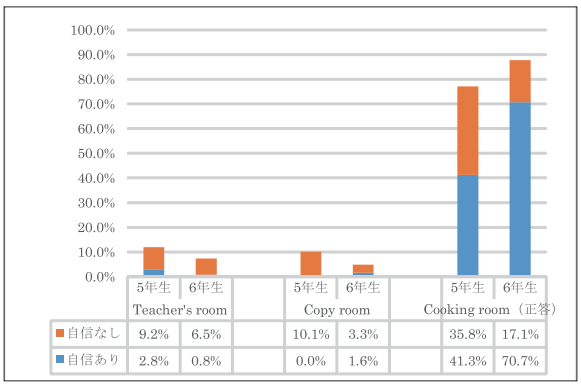


図５　問３「Cooking room」（学年別）

「問１」(正答：Library) では，選択肢の掲示物に教室の特徴を表す絵が含まれており，５，６年生共に正答者が多く，ほとんどの児童が，自信をもって正答している。

「問２」(正答：Nurse's room) では，掲示物中のイラストは消してあり，文字と色による判断が必要となる設問であるが，５，６年を合わせた正答率は８割近くと高くなっている。「問１」と異なるのは，自信を持って正答している児童の割合が低く，逆に，自信がなくても正答できる児童が，５，６年生を合わせると，正答者の４割程度を占めていることである。つまり，教室の特徴を表す絵の情報が得られなくなると，自信を持って選択することが難しくなる。しかし，英語の掲示物を通して，児童は，「完全には分からなくとも，何となく分かる」という感覚が育っていることが考えられる。渡邉他 (2010) が，主張しているように，英語の文字との「感覚に訴える出会い方」が英語の掲示物を通して実際に行われていることがうかがえる。

ただし，「問２」の結果からでは，色のみを根拠に選択した可能性があるため，必ずしも文字との「感覚的に訴える出会い方」が起きていると判断しにくい。そこで，「問３」(正答：Cooking room) では，文字の色がほぼ同じ掲示物を選択肢として設定した。その結果，５，６年生ともに８割前後の生徒があり，特に，５年生では，半数近くが自信はないが正答を選んでいることがわかる。

「問１，２，３」の結果から，英語の掲示物が児童の英語の学びや文字の認識に何らかの影響を与えていると考えることができる。特に，５年生において英語の文字との「感覚的に訴える出会い」を起こさせる手段として，英語の掲示物が有効に働く可能性があることが示唆される。

また，「問４」(正答：校長室) では，図６のように，全体の正答率が，かなり低い結果となった。ほとんどの児童が自信なく解答しており，推測で選択した結果，誤答となったと考えられる。「問４」は，他の設問と問題形式が異なることが影響したとも考えられるが，校長室の位置が，校舎の端にあり，児童が頻繁に通る場所ではないことや，掲示物が児童の目線より高いところにあるということも原因だと考えられる。さらに，校長先生を表す「Principal」や部屋を表す「Office」という英語は，「問２」の「Nurse」や「問３」の「Cooking」といった英語に比べて，文字も音声も児童にとって馴染みがなかったということも考えられる。

児童が英語を目にする頻度とその言葉の発音への慣れ親しみの度合いが，児童の掲示物における英語の認識の結果に影響を与えているのではないかと予想される。

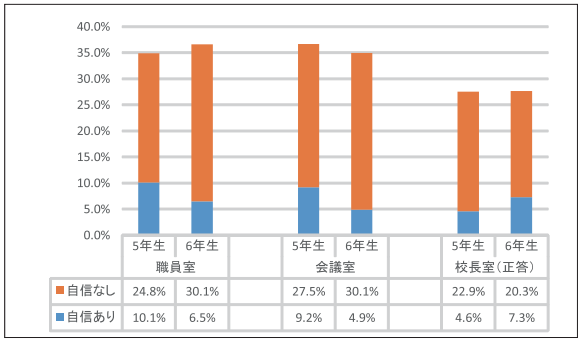


図６「校長室」(学年別)

4.2. 提示物の認識における学年差

4.2.1. ５年生・６年生の量的な学年差

５年生（n=123）と６年生（n=109）の「クイズ」の得点に差があるかを調べるために，t検定を行ったところ有意差が見られた。($t=-4.22$, $df=230$, $p<0.01$)

６年生は５年生に比べて，M小学校で一年間長く学校生活を送っている。また，英語の掲示物は高学年の教室付近に多く設置され，６年生が英語の掲示物に触れる機会は，５年生より豊富であると予想される。さらに，今回「クイズ」で取り上げた，特別教室は，学年が上がるにつれて使用する頻度も多くなっていく傾向にある。英語の掲示物を目にする頻度の差が，「クイズ」の正答数の差に表れたと考えることができる。

また，５年生と６年生のM小学校における英語授業の累積学習時間数にも差があることがわかる。表４のように，調査実施時点（９月上旬）での５年生の小学校入学以来の英語の総授業時間数は，約85時間であるのに対して，６年生は，約120時間となっている。これまでに受けた英語

の累積授業時間数の差が，英語の掲示物の認識や理解に何らかの影響を与えたとも考えられる。

表４　入学以来の英語授業総時間数

	1〜4年生	５年生	６年生	合　計
６年生	約70時間	約35時間	約15時間	約120時間
５年生	約70時間	約15時間		約85時間

4.2.2.　５年生・６年生の質的な学年差

「おまけ①」は，「Meeting Room」「Restroom」「Toilet」から，「同じ場所」を選ぶ「仲間選び」の問題であった。正解は，「Restroom」と「Toilet」であるが，正答を選んだ児童が最も少ない結果となった。「問4」の正答率よりも低い結果である。「校長室」に比べ掲示を目にする頻度は高いと思われるが，意識的に掲示物に注目していない可能性や，同じ場所が異なる名称で表されることを予期していなかったことも考えられる。さらには，「Restroom」という英語に慣れ親しんでいないことが想像できる。

誤答である「Meeting Room」と「Restroom」の組み合わせを選択した児童が最も多く，次いで，「Meeting Room」と「Toilet」であった。いずれの選択肢も「自信なし」として解答した児童が多く，ほとんど推測で答えたことがうかがえる（図７）。

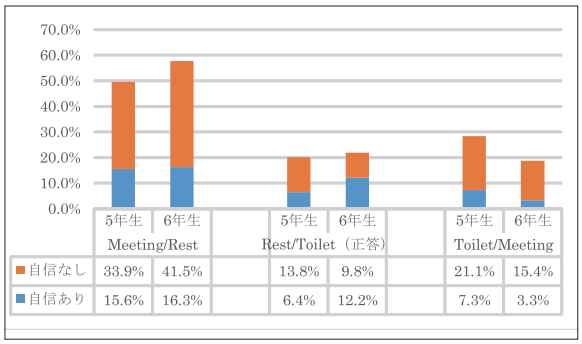


図７「おまけ①」学年別結果

児童が推測で解答を選択する際のよりどころとなっているのは，「Meeting Room」と「Restroom」では，「room」という共通した単語であり，「Meeting Room」と「Toilet」では，両者に共通する背景のデザインであると考えられる。その点では，５，６年生共に約半数の児童が「room」という共通の単語をよりどころに選択したことがわかる。学年別にみると，「room」に注目したと思われる解答では，６年生（約58％）が，５年生（約50％）を上回っている。それに対して，背景のデザインに注目したと思われる解答では，５年生（約28％）が，６年生（約19％）を上回っている（図７）。

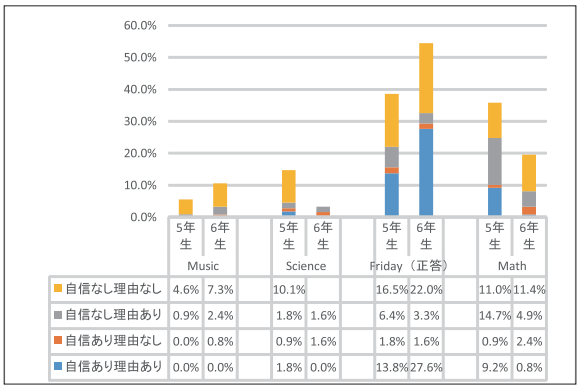


図８「おまけ②」学年別結果

「おまけ②」は，教科名（Music，Science，Math）と曜日（Friday）を表す英単語から「仲間外れ」を探す問題であった。５，６年生共に正答の「Friday」を選択した児童が最も多くなっている。ただし，正答を選択した児童の割合は，６年生（約55％）が，５年生（約40％）を上回っている。それに対して，誤答である「Math」を選んだ児童は，５年生（約36％）が，６年生（約20％）を上回っている。

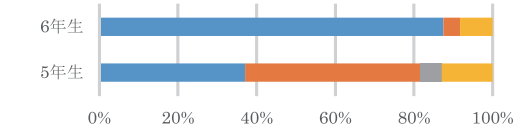
「おまけ②」では，同時に「仲間外れ」を判断した理由についても回答を求めたところ，５年生では約半数にあたる54名から，６年生では，約40％にあたる48名から回答を得た。回答を分析した結果，判断する際の着目点の違いから，判断の理由を次の（1）〜（4）の四項目に分類することとした（表５）。

表５「仲間外れ」理由の分類

(1)…単語の意味に着目したもの
(2)…文字の形や見た目に着目したもの
(3)…音声に着目しているもの
(4)…その他

分類の際は，解答の正誤は問わず，選択した理由によってのみ集計した。たとえば，(1)「単

語の意味に着目したもの」では，「Mathだけ月の名前だから。」という誤答があったが，「意味に着目したもの」として分類した。(2) は，単語の長さや含まれるアルファベットの種類などに着目して判断したもの，(3) は，発音の違いやローマ字読みの発音を思い浮かべ判定しようとしたものなどがあった。(1)〜(3) に分類されないものは，すべて (4)「その他」として分類した。



	5年生	6年生
■(1)意味	37.0%	87.5%
■(2)形	44.4%	4.2%
■(3)音声	5.6%	0.0%
■(4)その他	13.0%	8.3%

図９「おまけ②」理由による学年比較

図９に示したように，６年生は，「単語の意味に着目」して判断しようとしている児童の割合が多い。それに対して，５年生では，「文字の形や見た目」に着目して答えようとしている児童の割合が多いことがわかる。「文字の形や見た目」に着目して答えようとしている例として，「Mathには，“i”がないから。」，「Scienceは，同じ文字（c，e）が，２回使われているから。」，「Scienceだけ“e”がある」などが挙げられる。文字の形や見た目に着目して答えた児童の大部分は5年生であった。

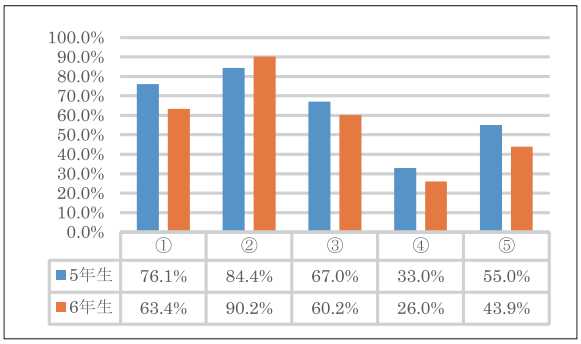
先に述べた「おまけ①」の結果と合わせて考えると，５年生と６年生では，英語の認識において異なるアプローチが存在するのではないかと考えられる。６年生は，共通する単語「room」により多くの児童が注目して「仲間」を選んだように，記号である英語のアルファベットの文字の集合である単語は，何らかの意味を持つ言葉であるという認識をしようとしている。それに対して，５年生では，背景のデザインの共通性を優先させたり，アルファベットの文字を記号として捉えようとしたりしていることがわかる。

これらの違いは，５，６年生児童の発達段階の違いに起因するものであるのか，英語に触れている量や学習の経験，通算の学習時間の違いによるものであるのかは，今後の研究を待たなければならない。しかし，これまでの結果から，５年生と６年生の間に英語の文字認識に対する何らかの隔たりがあることは予想される。

4.3.「アンケート」の結果・考察

4.3.1.「アンケート」結果と分析方法

５・６年生のアンケート調査の結果を比較すると図10のようになった。



	①	②	③	④	⑤
■5年生	76.1%	84.4%	67.0%	33.0%	55.0%
■6年生	63.4%	90.2%	60.2%	26.0%	43.9%

図10「アンケート」結果の学年比較
（①英語活動への意欲,②技能向上意欲，③異文化興味，④掲示物関心,⑤掲示物による意欲喚起）

グラフにあるように，学年間の傾向の差はあまり見られない。また，文部科学省が平成26年度に，全国の公立小学校で外国語活動を学ぶ小学５・６年生22,202名を対象に行った「平成26年度　外国語活動実施状況調査」の結果とも大きな違いは見られなかった。

「アンケート」による英語や英語学習に対する児童の意識と掲示物からの学びの関係について，５・６年生それぞれの分析と比較を行った。その際，「アンケート」の①〜⑤の「○の数」が多いほど英語や英語学習に対する総合的な意識が高いと判断した。また，「クイズ」の結果を点数化し，アンケートの結果とクイズの得点の関係から，英語や英語学習に対する意識と英語の掲示物からの学びの関係を分析していくこととした。

「クイズ」の得点は，それぞれの設問について，正答のうち『結構自信がある』を選択している場合は，２点，『自信がない』を選択している場合は，１点，不正解，無効解答は０点とし

た。「おまけ②」では，理由が正しく書けていれば，１点を加点し，全13点満点で採点した。理由の正誤の判断については，『Friday』が曜日を表し，教科を表す『Science/ Music/ Math』とは違う仲間であるという内容が分かるように書けていれば正解として加点した。

4.3.2. ５・６年生それぞれの結果の分析と学年間の比較

５年生のアンケートの◯の数と，クイズの合計得点と表した散布図は，以下のようになった(図11)。

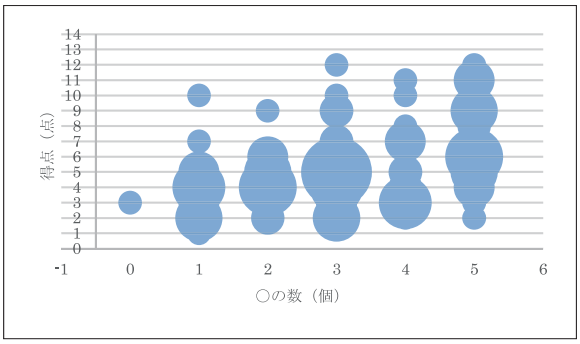


図11　英語や英語学習に対する意識の高さと「クイズ」の得点の関係（５年生）

５年生では，英語や英語学習に対する意識と「クイズ」の得点の間には，弱い相関が見られた(r=0.3986)。しかし，６年生では，図12のように，その相関は見られず (r=0.1890)，５，６年生で，異なる傾向があることがわかった。

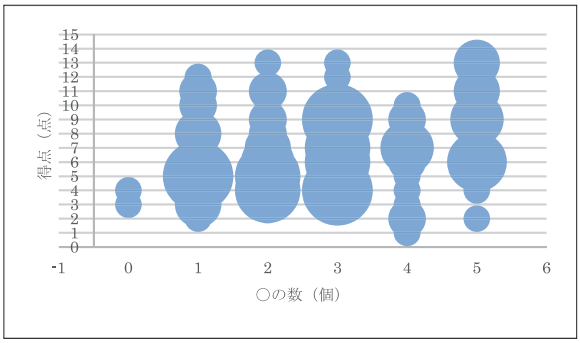


図12　英語や英語学習に対する意識の高さと「クイズ」の得点の関係（６年生）

ただし，６年生では，「アンケート②：技能の向上意欲」の項目と「クイズ」の結果に関連があることが分かった。つまり，５年生では英語学習に対する全体的な興味・関心・意欲が「クイズ」の得点に結びつくものの，６年生では，英語学習への興味・関心・意欲の高さが必ずしも「クイズ」の得点に結びつかず，「英語ができるようになりたい」という技能面での向上心や意欲が，掲示物の認識にも結び付く傾向があることが分かった。ここにおいても，５年生と６年生の間では，英語学習への意識とその成果が異なるつながりを見せていることが興味深い。

5. まとめ

本研究では，児童が英語の掲示物を，どの程度認識しているかということを明らかにしようとした。校内にある児童が頻繁に目にするような英語の掲示物については，約8割の児童が認識し意味を理解しているということが分かった。特に，５年生の段階では，「自信はないが何となくわかる」というような英語の文字との「感覚に訴える出会い方」が実際に行われている可能性が高いことが分かった。掲示物に用いられる文字の種類（デザイン調活字）による認識の差については，様々な要因が関係し，断定には至らず，継続した調査が必要である。

今後，小学校の英語教育の開始時期が早期化され，さらに，高学年での学習内容に「読むこと」「書くこと」が加えられたときに，英語の文字のドリル的な練習に終始するのではなく，高学年での文字指導を支え，英語の文字認識の素地を育てる手段として，英語の掲示物の積極的な活用が考えられるのではないだろうか。

アンケート調査の結果と「クイズ」の得点の結果から，英語や英語学習に対する意識が高ければ，英語の掲示物をよく認識しているという強い傾向は見られなかった。つまり，「英語学習が楽しい」，「英語が好きだ」という児童の意識が，英語の学びに直接つながっているわけではないことが分かった。また，そのつながりは，５年生よりも６年生では一層弱いことが言える。これまで，小学校の英語活動の授業においては，英語学習への関心・意欲や英語活動への積極的な態度面を重視してきたが，今後の小学校英語教育においては，児童の「できる感」をより高め，「英語ができるようになりたい」という意識

を高めていくことが大切であると思われる。

英語の掲示物においては，受動的に「見るだけの掲示」から，児童が仲間と関わり合いながら「能動的に関わる掲示」の在り方を目指していく必要があると考える。今後，具体的な英語の掲示物の在り方について追究していきたい。

6. 今後の課題

本研究で調査の対象とした小学校は１校のみであった。また，調査対象となった児童が，236人と十分とは言えなかった。このため，この結果を一般化するには，さらに多くの地域や小学校で同じような調査を行うことが必要である。また，今回の調査では同時期の５年生と６年生の結果を比較したため，同一集団の継時的な変化を見ることができていない。本研究の対象となった５年生が６年生になったときに，本研究の６年生のような英語の文字認識の仕方となるのか，それとも，この５年生の学年集団がもつ特性として，文字認識の仕方が変化しないのか継続して調査を行う計画である。学年進行とともに英語の文字認識に変化があるとすれば，その要因は，児童の一般的な発達段階の違いによるものか，英語の総授業時間数の違いによるものであるのか，また，その他の要因によるものであるのかを明らかにしていきたい。

参考文献

影浦攻 (2000).「英語活動の研究体制・環境づくりで知っておきたい基礎・基本」影浦攻，小学校英語セミナー委員会（編）『小学校英語セミナーNo. 6　英語活動をもりあげる研究体制・環境づくりのモデル12』, 4-6 東京：明治出版株式会社.

直山木綿子 (2015).「特集　授業改善を考える　進む英語教育改革。小学校の外国語の今後は？『英語情報2015 10・11月号』, 4-9 東京：日本英語検定協会

本田勝久・山本長紀・寺井千景 (2013).「小学校英語活動に関する掲示物の語彙分析―「学びに繋がる掲示物」の作成に向けて―」『千葉大学教育学部研究紀要』第61巻, 167-172.

文部科学省 (2010).『小学校学習指導要領』東京:開隆堂出版.

文部科学省 (2014).「「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について」 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm

文部科学省 (2015).「平成26年度「小学校外国語活動実施状況調査」の結果について」 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm

文部科学省 (2015).「小学校の新たな外国語教育における補助教材の作成について」 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm

渡邉時夫・佐藤令子・粕谷恭子 (2010).『ここから始めよう　小学校英語　新しい指導の第１歩』東京：明星大学出版部.

参考資料　学校施設の英語表示例

1. Classroom (ex. 5-2 classroom) 教室（例：５年２組教室)
2. Music room　音楽室
3. Arts room　図工室
4. Science room　理科室
5. Home economics room　家庭科室
6. English room　英語室
7. Multipurpose room　多目的教室
8. Computer lab　パソコン室
9. School library　図書室
10. Teachers' room　職員室
11. Principal's room　校長室
12. Meeting room　会議室
13. Nurse's room　保健室
14. Gym (gymnasium)　体育館
15. Swimming pool　プール
16. Restroom　トイレ
17. School office　事務室
18. Lunchroom　ランチルーム
19. School kitchen　給食室
20. Broadcasting room　放送室
21. Copy room　印刷室
22. Storage room (ex. Music storage room) 準備室（例：音楽準備室)
23. Students' entrance　昇降口
24. Shoe lockers　靴箱